研究発表会報告

昭和58年度大学院研究発表会が下記によって行なわれました。

時：10月30日(日)　9：30—12：00

場所：寧静館　5階会議室

司会：勝山貴之・原田温代

Robert Frost の詩における「孤独」
——特に消極的孤独から積極的孤独への転換について——

坂本季詩雄

フロストの作品において，自分の日常性の中で人間は不安定な状態のまま人生を送っている。日常性はあまりに複雑で不可解であるため，人間は自然の中に入ることにより日常性から解放され，本質的自我の回復を試みる。しかし自然の中で経験する孤独は日常性を全く欠いているため疎外という消極的な意味での孤独におわる。この経験は自己の内外へバランスよく意識を向ける必要を人間に悟らせることになる。再び日常性のまつ家庭へ戻った人間は本質的自我を失うことなく，しかも社会から孤立することなく，自らを社会の中に位置づけようと試みる。この時，家庭は社会と個人の間に障壁，或は防壁となりこの試みを成就させる一助となる。ここに於て消極的孤独は積極的孤独に転換される。

寸　評

坂本氏の「孤独」のとりあげ方について，comment が集中した。氏は自我を守るという作者の意識を背後に見ているが，今世紀には自我への疑いが強くあり，この点をふまえなければ，自我の意味を simplify しすぎる危険性があるとまず指摘された。また「孤独」に「消極的」，「積極的」と二重の

意味を見ているが，この概念を表わす用語には“passive,”“active”よりも“negative,”“positive”の方が適切であるとされた。さらに，フロストは家庭や森の両方においてこの二重の孤独を経験し，その balance を保とうとしている点が示され，Frost と家庭，森との関係について考察が必要であること，また作者の態度が同じテーマに関して初期と後期とでは変化している面もあわせて考慮すべきであることが課題として示された。（飛鳥井）

統語論の自律性の問題について

赤楚治之

チョムスキーの文法研究の重要な特徴のひとつに「統語論の自律性」がある。これは統語部門のいろいろな規則や条件は意味原素から独立して構築されるべきだという主張である。チョムスキーはこれを生成文法最初からの一貫した主張と述べているが，文法モデルが自律性を持つようになるのは，痕跡理論が導入され，意味部門への入力がS構造に限定された文法が開発された1970年代半ばのことである。それまでの文法モデルは，不完全なものであった。初期理論では統語レヴェルにかなり意味論的能力が認められており，標準理論では Katz-Postal の仮説により，変形規則の選択に意味が関与してしまうことを許していた。今回の発表では，「統語論の自律性」という観点から，生成文法の発展の跡をたどり，どのような理論修正がなされ，どのような功罪をもたらしたかを論じてみた。

寸　評

発表後，tough movement は，絶対的な自律性に対する反例となり得るのか，という問題提起がされた。つまり“John is easy to please”という文は，“It is easy to please John”という文から tough movement により生成されたという考え方の他に，この文は，“John is easy to please John”

という深層構造から，equi-NP-deletion により生成されたという考え方も可能なのではないか，そして，この観点から更に研究を進めることにより，tough movement が絶対的自律性に対する反例にならないということを示し得るのではないか，という指摘がなされた。その他，拡大標準理論の文法モデルに対する質疑も行なわれた。（岡）